

氏 名	松 本 隆 志
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（社会学）
学 位 記 番 号	甲社第57号（文部科学省への報告番号甲第585号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2015年9月14日
学 位 論 文 題 目	子供社会の暴力に関する基礎理論序説
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 荻 野 昌 弘 （副査） 教 授 佐 藤 哲 彦 中 島 道 男（奈良女子大学大学院教授（人文科学系）） 稲 垣 恭 子（京都大学大学院教育学研究科教授）

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、いじめや非行など未成年者の人間関係のなかで生じる暴力を捉えるための包括的な理論的視座を構築しようとする試みである。そのために、本論文が対象としている具体的な問題とは一見関連がないように見えるホップズの『リヴァイアサン』やモースの「贈与論」の新たな解釈を行い、いじめや「不良」行動に関する先行研究が十分に問題を捉えられていない点がどこにあるのかを明らかにしたうえで、いじめなどの暴力を真に社会学的研究の領域として構築することをめざしている。

第一章では、社会学において、物理的暴力について直接に問われることがなかったという観点から、なぜ社会学理論について暴力が問われにくかったのかについて、既存の社会学理論に関する検討を試みている。松本氏によれば、社会学は暴力を論じてこなかったわけではなく、それを「秩序問題」に「反転」させて捉えてきたという。たとえば、パーソンズの「ダブル・コンティンジェンシー」概念は、「ホップズ問題」の延長線上にあり、この意味で暴力について考察する可能性があったはずだが、「価値」という秩序問題の解決解だけが提示される。ルーマンの場合にも、暴力を処理するための「メディア」のほうに焦点が当てられている。

同様に、ウェーバーからブルデューに至る権力の流れにおいても、物理的暴力の問題は等閑視される。ウェーバーは、暴力よりも継続的な「支配の正当性」がいかに可能かを問い、ブルデューは、暴力でも学校における「象徴的暴力」すなわち「物理的」ではなく、「象徴的」暴力のみについて問う。つまり、物理的暴力そのものは、直視していない。

以上のように、暴力が社会学理論において、その中心から外れたのは、近代国家は、「正当な物理的強制の独占」をしているためである。その結果として、暴力への問いは、「なぜわれわれは暴力を振るわずにおとなしくしていることができるか」にならざるをえない。正面から暴力を問うために、松本氏は、ディシプリンとしての社会学成立以前、具体的には、ホップズまで戻る必要があると指摘する。なぜなら、ホップズこそ、「自然状態」と「コモンウェルス」を分け、自然状態における「戦争」すなわち暴力自体を考察しているからである。松本氏によれば、ホップズが指摘しているのは、「暴力」そのものではなく、「暴力への不安」である。この「暴力への不安」という概念が、本論文を通底する概念となる。

第二章では、「暴力の不安」を「不確定性」の問題として取り上げ、サーリンズに触発されながら、ホップズの「暴力への不安」をより実証的な場面で考察したのは、モースの「贈与論」であるとして、「贈与論」

のなかに、暴力の社会学理論を構築する可能性が見出される。松本氏によれば、それは、一見、「贈与交換」を通じて「連帯」している「未開社会」を記述しているように見えて、その背後には相互不信や衝突の可能性を示している。

モースの「贈与論」において、贈与の背後に暴力のリスクがある点について、はじめて指摘したのは、サーリンズである。サーリンズは、ホッブズの「自然状態」とモースの「未開社会」は、「社会の下部構造は、戦争にほかならない」ことを示しているといい、続けて、モースは、ホッブズとは異なり、第三者的権力が不在なままで、贈与交換を通じて「平和」を維持している社会を描いているのだという考察をしている。もちろん、対立関係が完全に消滅したわけではない。未開社会の贈与交換による平和は暫定的で、脆弱である。しかし、サーリンズは、第三者的権力が不在の秩序の可能性を信じようとしており、その脆弱性については、深く考察していない。一方、松本氏は、この脆弱性の部分こそが重要であるとして、「贈与論」の独自の解釈を試みる。

「贈与論」で展開される贈与交換の特徴は、「義務的」「闘争的」の二点である。これは、「連帯」「紐帯」が「不信」「不安」を常に抱えていることを示している。贈与交換は両義的な状況をそのまま維持している。こうした不安の解消のために、贈与交換が用いられる。しかし、交換する主体は対等な関係（＝力が拮抗している関係）であることも手伝い、完全に不安が解消されることはない。目先の義務としての贈与交換に翻弄され、また常に暴力への不安に駆り立てられていかざるをえないのである。松本氏は、こうした状況は、単にモースが対象とした「未開社会」だけではなく、別の人間関係にも適用できるとして、第三章以降で、その可能性について、「いじめ」「不良行動」について論じていく。

第三章では、第一、二章で展開した暴力に関する理論的枠組みを用いて、それがいじめの先行理論では欠けていた部分を克服する可能性を示そうとする。まず、森田洋司、内藤朝雄などのいじめ理論を検証して、森田をはじめとするほとんどの論者が、いじめをマクロ的次元の問題に還元して、説明しようとする点を批判する。既存のいじめ理論は社会統制論となってしまうか、単なる「現代社会論」の様相を帯びてしまい、いじめが具体的な人間関係のなかで生じている点が十分考慮されていない。唯一の例外は内藤理論である。内藤は、いじめを相互行為としてミクロの次元で捉えようとしている。特に、いじめが学校という空間では「不可視化」される点を考察している。ただ、内藤の理論は、本人もみずから志向するように心理学的な性格を強く帯び、かつ「暴力への不安」についてはほとんどふれていない。

松本氏は、モースから得た「暴力への不安」が子供の一見友好的な人間関係の底に伏在しており、この不安から、当事者は「交遊」を続けていかざるをえない「義務」を意識し続けると指摘する。この義務的な関係に囚われると、当事者は、いじめられているかどうかさえ認識できなくなる。いつからいじめが始まるのか。いかにしていじめが起こるのかということさえ、はっきりとさせることは難しいのである。

第四章では、通常いじめとは異なるカテゴリーとされる非行について、雑誌を用いて分析している。ピラミッド型の組織を形成している不良少年の世界について、やはり暴力への不安がつきまとう点を明らかにしている。不良少年が、いたずらに「自己呈示」せざるをえないのも、暴力への不安に起因している。先輩や暴力団に「気合」を見せる不良少年たちは、モースが「贈与論」で取り上げた贈与交換の究極形態であるボトラッチに近づく。

いじめにおいても、非行においても、当事者は、暴力への不安が常につきまとう不確定性を生きることから、未来への展望を考えることができず、第三者から見れば不合理に見える選択を「最良」の選択と捉えてしまう。したがって、未開社会の贈与交換が義務的で、交換の輪から抜け出せないように、いじめのような暴力が支配している世界から逃れることができないと松本氏は結論づける。そして、最後に、こうしたなかで「友情」とはいかなるものであるべきかについて考えようとしたアレントのいう「対話」の条件を考えるためには、まず対話が成立しないいじめの人間関係を生きるとはどういうことなのかを明らかにしなけ

ればならないと提言する。

論文審査結果の要旨

いじめは、断続的に社会問題化する。そのたびに、さまざまな提言や処方せんが、社会学者も含め、各方面から提示されるが、それがどの程度の効果を発揮しているのかははっきりしない。松本氏は、こうした状況に対して、いじめ問題をまずは社会学の対象として適切に位置づけ、その理論枠組みを構築する必要があるとする。

そのために、松本氏は、まず、ウェーバー、パーソンズ、ルーマン、ブルデューなどの社会学理論を渉猟し、社会学者がその重要性を理解しながらも、十分に展開してこなかった点について、明らかにする。それは、物理的暴力の問題である。近代国家が暴力を行使する権利を独占している以上、暴力が蔓延している状態ではなく、秩序がいかに成立しているかが中心的な課題となることは必然であるともいえるが、松本氏は秩序問題の裏にある「暴力問題」ともいべき問題をホッブズに回帰しながら捉えようとしている。この点が、本論文の第一の意義である。

松本氏は、ホッブズ理論における「戦争状態」は、実は暴力自体というより「暴力への不安」であると捉えたうえで、サーリンズを参考にしながら、ホッブズと最も類縁的な社会学者としてのモースを発見する。モースが考察している未開社会の贈与交換は、単に秩序を作り出すだけではなく、同時に戦争状態への不安を抱えている。この不安を解消するために、贈与交換の義務を履行するが、不安が完全に解消されることはない。なぜなら、モースの「未開社会」においては、「リヴァイアサン」のような超越的な権力＝国家によって秩序を作るのではなく、各部族が対等な関係にあるままで脆弱な平和を築いているにすぎないからである。本論文の第二の意義は、このように、「贈与論」のなかに、贈与交換に基づく秩序の脆弱性があり、それが超越的な権力を求めないことに起因している点を積極的に読み込み、独自の解釈・視点を提示しようとした点である。

第三の意義は、「贈与論」から得た知見が、現代社会のいくつかの局面にも適用可能であり、とりわけ青少年の暴力の問題を扱ううえで有効であることを示した点である。学校は、近代国家の下で成立した制度であり、暴力が生じる余地は少ないように見える。しかし、実際には、監視が行き届かない場所、時間帯（たとえば休み時間）があり、そこでのこどもの人間関係は、そもそも平等であるがために不確定であり、「暴力への不安」を惹起しやすい。そのなかで、第三者から見れば明らかにおかしい、すなわち「いじめ」「暴行」にしか見えない非合理的な「交換」が行われる。ただ、当事者たちは、このことに気づかず、モースの「未開社会」が際限なく、贈与交換を続けるように、暴力を孕む人間関係のなかにとどまり続ける。モースの「贈与論」の新たな解釈を通じて、青少年の暴力全体をひとつの社会的対象として構築しようとした点、また、いじめのような具体的問題への社会学理論の応用可能性が有効であることを示そうとした点は高く評価できる。

一方で、本論文にはいくつかの問題点がある。

まず、理論的な点においては、たしかにウェーバー以降の社会学理論を丹念に読み込んでいるが、不確定性や暴力について論じる以上、信頼やリスクに関する理論についての言及が、より具体的にあるべきである。また、いじめや非行を扱ううえで、構築主義に対してどのようなスタンスを採るのかについても明確にする必要があるが、それが欠如している。既存の社会学理論に欠ける点を指摘して、モースの重要性を説いている以上、先行理論へのより網羅的な目配りが必要とされる。加えて、モース解釈についても、近年のカルサンティ（Karsanti）、シャニアル（Chanial）などのフランスの最新の研究成果について検討したうえで、解釈の独創性が論じられるべきである。

また、モース等の社会学理論がいかん、青少年の暴力の問題に適用されるかについても、議論が粗いといわざるをえない。第一に、せっかくホップズやモースに基づき独自の理論枠組みを構築しながら、それを用いた青少年の暴力の具体的事例を分析する際には、議論に混乱が生じている。それは、ひとつには、「自然状態」「未開社会」と、法、制度が整備された近代国家では事情が異なるにもかかわらず、なぜ現代においてもモースの理論が有効になるのかについて、必要以上に説明しようとしているためである。このため、ときに議論が、青少年の人間関係のような超越的な権力に基づかない人間関係においては、「暴力への不安」から交換・交流を繰り返し、抑圧的な人間関係にとどまってしまうという中心的な仮説から、横道にそれてしまう。第二に、いじめに関しては、遺書や進学塾の投稿欄など興味深い資料は用いているものの、本論文で提示した仮説を検証するために、さらなる調査を行う必要がある。また、せっかく、いじめと非行を同一の視点で扱えることを示しながら、その説明がやや不十分であることも指摘しておかねばならない。

とはいえ、青少年の暴力をそこで築かれる相互行為秩序のなかで捉える理論枠組みを、モースの理論を通じて構築した点は、高く評価されるべきであり、本論文が、今後よりスケールの大きな研究に深まっていくことを期待させる。

以上、本審査委員会は、本学位論文の内容と研究活動を慎重に審査し、2015年6月2日に行われた口頭試問の結果もあわせて、松本氏は博士（社会学）の学位を授与するのにふさわしいとの結論を得たのでここに報告する。